

学校教育目標	社会を「生き抜く力」を育む ～自ら学び、心身共にたくましい児童の育成～		総合評価
運営方針	○強い情熱と使命感・責任感をもった教職員集団で、子どもたちが「元気に登校 笑顔で下校」する学校づくりを推進して、「社会を生き抜く力」を育てる。 ○3G(言語活動、五條学、学校運営協議会)を大切にしたい学校づくりを推進して、保護者や地域の人々から愛され信頼される学校を目指す。		
令和元年度の成果と課題	本年度の重点目標	具体的目標	B
○様々な取り組みにより、子どもたちの読書量は着実に増えてきている。 ○自分たちが住んでいるまちについて調べ学習していく中で、ふるさとのことを大切に思う気持ちが育ってきている。 ○地域のお店や工場を見学したり、地域の自然とふれあったりする活動を多くとることができた。ゲストティーチャーやボランティアの方々から様々なことを教えていただくことができた。 ○外遊びチャレンジに積極的に取り組み、校内のなわとび運動を推進することができた。 ○子どもたちが興味をもったり、意欲的に取り組めたりする体育の授業を展開し、子どもたちが楽しんで運動する姿が、授業中にも休み時間にもみられた。 ●学力の二極化が解消できていない。四則計算等の基礎的な学力を向上させていく必要がある。 ●挨拶の徹底がまだできていない。自分から挨拶ができるようになることを目指すため、挨拶の重要性や意義を職員で共通理解し、挨拶運動の推進を行っていききたい。 ●家庭学習や元気アップ週間の充実を図るため、家庭との連携を更に密にし、取り組んでいかなければならない。	◎確かな学力をつける。	○学習意欲を高める授業展開や指導の工夫を充実させる。 ○学習習慣を定着させ、自主学習の充実と質の向上を図る。	
	◎豊かな心を育てる。	○自分から進んで気持ちのよいあいさつを交わし、他者との関わりの中で、伝え合い、認め合える児童を育成する。 ○地域社会へ貢献したり、地域教育力を積極的に導入したりする活動を進める。	
	◎心身ともに健康健全な生活を目指す。	○自ら進んで基本的な生活習慣を身につけようとする意識を高める。 ○自分の課題を明確にし、課題に応じた活動を計画的に取り入れるとともに、運動好きを増やすための体育学習の充実を目指す。	

評価項目	具体的目標(評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価結果	成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方策
確かな学力をつける。	○学習意欲を高める授業展開や指導の工夫を充実させる。	主体的で対話的な深い学びの実現を目指し、標準調査全国平均を上回る。	B	自ら学び共に高め合う児童の育成を目指し、言語活動の充実と読み取る力の向上のため取り組んだが、標準学力調査の平均値には及ばず、課題解決に向けた取組を重点化し、進める必要がある。 とときめきタイムの活用・個別の学習支援などに取り組んできたが、達成率は72%と目標には及ばなかった。一方、授業の振り返りを重視したことで、記述問題を無回答で提出する児童が減ったり、自分の考えを文章で表現出来る児童が増えたりしたのは成果である。 年間の図書の貸出冊数平均は35冊と目標には及ばなかったが、図書館司書との連携をしたことで、学習で図書室の本を利用する機会が増えた。また、教師による読み聞かせ等、様々な取組により、読書に興味をもつ児童も増えた。自主的に図書室を利用する児童を増やすことが課題である。 自主学習の手引きの作成、見本ノートの掲示、良いノートの紹介など様々な取組を行ってきたが、児童アンケートで「自主学習に一生懸命取り組んでいる。」という項目の達成率は60%と大変低かったことから、次年度は最重要課題として取り組む必要がある。	・タブレットを積極的かつ有効的に活用することで学習意欲の向上と児童の思考の支援を図る。 ・五小スタンダードを意識した授業作りの徹底を図る。 ・国語辞典を積極的に活用する。(常に個人持ち) ・各教科で音読を大切に、「読む力」を高める。 ・質の高い振り返りを目指す。 ・読書貯金通帳を毎月1度必ずチェックする。 ・教師の読み聞かせや本の紹介などを今まで以上に挙げる。 ・低学年から系統立てた自主学習の取組を見える化し、共通理解を図る。 ・読書も自主学習も、学校全体の取組として各学級で共通した取組を徹底する。	・小中の9年間がとても大事だと思っているので、小中の連携をしっかりと進めていってほしい。そのために教員同士の交流を大切に、縦のつながりを意識してほしい。 ・子どもたちはICTに関して、覚える速度がとても速い。学習で生かすことができるのは良い点だが、わからないことがあっても辞書を引くことがなくなったり、本を読まなくなったりしなにか心配である。上手な活用をしてほしい。 ・タブレットの導入により、リモートでの学習が可能になった。放課後の補習や自宅での学習で活用して、学力補償につなげてほしい。 ・教職員のICT研修を充実させる必要がある。また、保護者向けにも情報をわかりやすく伝える必要がある。
	○学習習慣を定着させ、自主学習の充実と質の向上を図る。	読書活動活性化事業モデル校として、司書との連携のもと、おすすめの本の設定や読書貯金に組み込み、児童の平均読書冊数を一人40冊以上にする。 自主学習の手引きを活用し、モデルを通して、意欲的に取り組む児童を8割以上にするとともに、質の高い自主学習ノートの実現に向けた取組を充実させる。	B			
	○自分から進んで気持ちのよいあいさつを交わし、他者との関わりの中で、伝え合い、認め合える児童を育成する。	気持ちの良いあいさつの励行の徹底を図り、自ら進んであいさつする児童を9割以上にする。 児童の自尊感情の向上を図る取組を推進し、自他を思いやる気持ちを養い、学校が楽しいという児童を9割以上にする。	B			
豊かな心を育てる。	○地域社会へ貢献したり、地域教育力を積極的に導入したりする活動を進める。	地域ボランティアとの連携のもと、ふるさと学習の深化、充実を図り、ふるさとを大切に思う児童の割合を9割以上にする。 地域教材や地域人材を取り入れた活動の充実を図る。	A	達成率は92%と目標を上回ることが出来た。教科を横断して、ふるさと五條と関連させたり、総合的な学習の時間に五條のことを深く学んだことが結果につながったと考える。今年度は、系統だったふるさと学習の推進に力を入れていきたい。 感染症予防対策に気をつけながら、ゲストティーチャーを招聘したり、地域へ赴いて学習をしたりすることができた。特に、生活科や総合的な学習で地域のことを学ぶ機会を多く取り、活動を充実させることが出来た。	・継続して職員とともに、高学年児童がモデルとなるよう指導の徹底を図る。 ・児童主体の挨拶運動の展開を検討する。 ・エンカウンターを取組を来年度も実施する。 ・個々の児童への支援を今まで以上に組織的に行っていく。	・挨拶とともに「ありがとう」という言葉が増えてきた。継続して挨拶の指導を続けてほしい。 ・今年度は多くの活動を子どもたちは我慢していた。地域やPTAの協力の中で、できる活動は行ってきたが、来年度も学校が楽しいと実感することができるよう活動を検討してほしい。
	○心身ともに健康健全な生活を目指す。	『元気アップ週間』の取組を通して、基本的な生活習慣を定着させるために保護者と連携を図り、早寝・早起き・朝ごはんの習慣が身につけている児童を9割以上にする。 『五夢りん宣言』を実生活でさらに意識させるための取組を充実させ、規律ある学校生活の定着を図る。	B	9割以上という数値目標に対して、朝ご飯は94%だったが、早寝・早起きは70%ほどと、目標には及ばなかった。元気アップの項目を昨年度から減らし、焦点化できたことで持続可能な取組となった。保健便りで発信することで啓発にもつながったと考えられる。 毎朝全学級で「五夢りん宣言」を暗唱させたり、毎月始めの朝会で講話をしたりして、児童に意識付けを行ってきた。しかし日々の生活の中で意識ができていないと感じることもある。「五夢りん宣言」を意識した指導を継続していきたい。	・基本的な生活習慣を身につけさせるため、家庭への啓発を継続的に行っていく。 ・年度初めに、なぜ「五夢りん宣言」ができたのか、なぜ大切なのかを職員・児童とともに共有する。 ・1日、もしくは1週間の重点目標を決め、帰りの会で振り返りを行う。	・早寝早起きができないのはどうしてなのか分析し、学校でできることと家庭でできることをうまく連携させて子どもたちの生活習慣の改善を図る必要がある。ゲームや動画視聴に時間を取られ、生活リズムが崩れているのではと懸念される。 ・タブレットの導入により学習面でメリットはあるが、ネットいじめやネット依存等のデメリットも考えられる。インターネットを利用する際のルールやマナーを身につけさせなければならない。 ・体力をつけ、体を健康にすることで心の健康にもつながる。様々な運動を通して、心身ともに健康な子どもたちになってほしい。
今年度の成果と次年度への課題		1年間を通してなわとび運動に取り組むとともに、外遊びチャレンジ登録数を400以上にする。 個々に課題をもたせ、目標を設定し、意欲をもって運動に取り組ませるとともに、体育の学習等を充実させ、体を動かすのが好きだという児童を8割以上にする。	A	400件以上という数値目標に対して、2学期までで437件の登録をすることができた。年間を通してなわとび運動に取り組んできたことで、できるようになった児童が増えた。また、外遊びチャレンジのランキングを掲示したことで、意欲的に取り組む児童が増えた。 達成率83%と目標を超えることができた。学習カードや場作りの工夫等で、個々に課題をもたせることができた。また、スポーツテストを春と秋に2回実施したことで、成長を感じることができた児童もいた。運動が苦手な児童へのアプローチが今後の課題である。	・学習カードの充実を図り、主体的に運動に取り組ませる。 ・体力テストの課題に焦点をあてた取組を行う。 ・体育指導の校内研修を充実させる。 ・技能面に差がある領域は児童の実態を年度初めに引き継いでおく。	
		[成果] ○学習の「めあて」と「ふりかえり」をつなげることができるようになり、記述問題を無回答で提出する児童が減った。 ○様々な取組で、読書に興味をもつ児童が増えた。 ○挨拶の声が大きくなり、自分から挨拶する児童が増えてきた。 ○外遊びチャレンジを充実させ、県内でも上位を占めることができた。 ○体育学習の充実、多様な外遊びにより児童の体力向上を推進することができた。		[課題] ○「読み取る力」とともに、基礎・基本の学力を向上させるため、焦点化した取組を実施する必要がある。 ○学力の二極化とともに、学習意欲の二極化を解消する必要がある。特に、自主学習の取組については、来年度の最重要課題として取り組む必要がある。 ○継続した挨拶指導と児童主体の挨拶運動を進め、年間を通して挨拶に対しての意識を高くもち、校内のみならず、校外に出ても自主的に挨拶ができる児童の育成を目指す。 ○「五夢りん宣言」を職員は指導の中で、児童は生活の中で意識していくことで、自己の生活を見直し、規律ある学校生活の充実を図る必要がある。		